

# American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第12回

## ボニー・レイット 「ニック・オブ・タイム」

年をとることの切なさを歌う



Bonnie Raitt  
"Nick Of Time"  
Capitol/EMI©CDP7-91268-2  
[1989]

この曲が出るまで、音楽好きの間ではブルースのギターリストとして知られるカルト・アーティストだったが、それ以外の世界ではマイナーだった。しかしこの曲のおかげで、彼女は世界のスーパースターになったのだ。

「ニック・オブ・タイム」は、アメリカでもそれまであまりなかったテーマを詩にしている。時代は、初代のロック・ファンもロック・アーティストも、互いに年を重ねはじめた80年代。彼女は人間が年をとっていくことの切なさを歌った。同世代の女性を感じていることを歌にしたのだ。

80年代のアメリカはキャリアアウーマンが表に出てきた時代だ。ヤッピーで仕事もバリバリこなす女性。ヤッピーはヤング・アーバン・プロフェッショナル、YUPpieに由来している。仕事や遊びに明け暮れ、気づいたらいい大人になっていて、彼や家族を作るのを忘れてしまったと感じた女性も多かったに違いない。そんな人たちに、この曲がぴったりはまったのだと思う。

彼女は71年のデビューからアルバムを出し続け、10枚目の『ニック・オブ・タイム』でやっと大ブレイクを果たした。グラミー

今ではもうスーパースターといっても過言ではないボニー・レイット。彼女を一躍スターダムにのし上げた曲が、この「ニック・オブ・タイム」だ。1989年にリリースされると、彼女はあつという間にオーヴァーナイト・センセーションになった。オーヴァーナイト・センセーションとは、それまで無名だった人物が、一夜にして有名になることを指す言葉だ。彼女はデビュ

ーの時からさまざまなソングライターのカヴァーをしてきた。ジャクソン・ブラウン、カール・ポップ、ビル・ペイン……。そもそも彼女の歌がはじめて人気のラジオ局で流れるようになったのは、77年のデル・シヤノンの「悲しき街角(Runaway)」のカヴァーだ。そして十数年を経て出した「ニック・オブ・タイム」が彼女のはじめてのヒット曲で、その上にオリジナルだった。

賞を3部門で受賞したのだ。この時、彼女は39歳だった。そして、ボニー自身もドラッグをやめ、新しいレベルに移って新しい人生を歩き始めた。プロデュースしたのはロック・バンド、ウォズ・ナット・ウォズのドン・ウォズ。わりと新しい感じの音楽を作るのを得意とするプロデューサーだ。また時を同じくして、ジェイムズ・テイラーやキャロル・キング、ジョニ・ミッチェルなどが、若者が大人になっていく曲を書いて成功していった。俺はその頃、三代前半。はじめてこの曲を聴いたのは、当時付き合っていた年上の彼女と別れるときと重なっていた。彼女はボニー・レイットと同じ年。仕事をしている彼女もまた自分の年齢と向き合いはじめた頃で、自分たちの問題とこの曲のテーマがリンクしていた。では、詩の内容を説明しよう。

A friend of mine she cries at night  
And she calls me on the phone  
Sees babies every where she goes  
And she wants one of her own

毎晩、私の女友達が泣きながら電話をか

けてくる。どこへ行っても、どこを見ても赤ちゃんばかりだという。友達は自分のベビーが欲しいといっている。そんな詩だ。

She's waited long enough she says  
And still he can't decide  
Pretty soon she'll have to choose  
And it tears her up inside

友達は今もう十分、彼のことを待ったと言っている。それでも彼は決められない。彼が決めるのを待つより、自分で決めなくては。女性は子供ができない年になってしまっからね。

最後の一行の「And it tears her up inside」は、心が張り裂けるという意味だ。友達は、すでに傷つき過ぎていてるように思える。

She is scared  
Scared to run out of time

彼女は恐れている。時間が敵になってきているんだ。「run out of time」は、時間がなくなっていくという意味だ。

I see my folks, they're getting on  
And I watch their bodies change  
I know they see the same in me  
And it makes us both feel strange

「folks」は親の「folks」。「getting on」は年をとっていくこと。「watch」は「getting on」の後には、本当は「in years」。「どう言う言葉がついてくる。つまり親を見てみると、年をとるごとに体もどんどん変わっていくのがわかるという。それと同じように、親も自分のことを見て、同じ気持ちになっているだろうというんだ。お互いちょっと不思議な気持ちになってしまおうと歌っている。このあたりは結構切ない。誰にでも当てはまるようなことだし、できれば目を背けていたいことだから。

No matter how you tell yourself  
It's what we all go through  
Those lines are hard to take  
When they're staring back at you

皆、同じ経験をするとかかってはいても、皺は嫌なものだ。英語で皺はラインという。

鏡に映った自分を見ると、嫌が応でも顔に皺が見える。'hard to take' というのは、受け入れにくい、認めたくないという意味だ。その皺が鏡からにらみ返しているという。さらに、ラインにはもう一つ意味があつて、それはつながっているということ。親からもらうものを指している。例えば男性方の名字をとるのもそう。DNAから受け継いでいる性格もラインという。

Scared to run out of time

時間がなくなるのが怖いという詩がくり返される。先にも触れたが、'out of time' とは時間切れのことだ。例えば試験会場でアウト・オブ・タイムといえ、もう試験時間は終了ということだ。

When did the choices get so hard?

With so much more at stake

Life gets mighty precious

When there's less of it to waste

ここからは女友達ではなく、ボニー・レイット自身の恋愛のストーリーだ。



年をとってくると、若い頃と違って何かを選ぶのが難しくなっていく。ここでは、目の前に現われる人生の選択肢を選ぶのが、いつからこんなに難しくなったのだろうかと言っている。年をとってからのチョイスは、あとがない分、人生を大きく左右するからだ。人生に残された時間を無駄にしたくないという気持ちが働いて、選ぶことが難しくなってしまうのだ。'at stake' というのは、賭けで負けてしまう可能性があることだ。つまり残りの人生の時間を考えて、臆病になってしまうのだろう。

Scared to run out of time

時間がなくなっていくのが怖い。

Just when I thought I had enough

And all my tears were shed

No promise left unbroken

There were no painful words unsaid

もうこれ以上、辛いことはいらぬ。すでに涙は枯れてしまった。裏切られる約束なら、もうしない。お互い傷つく言葉はい

い尽くした、彼女はそう言っている。しかし、そんな彼女にこれから新しい人生が待っているんだ。

You came along and showed me

How to leave it all behind

You opened up my heart again

And then much to my surprise

最初の 'You came along' は、あなたが現われたという意味だ。自分の目の前に新しい彼が現われて、あらゆる問題や嫌なことを忘れさせてくれた。'leave it all behind' は、全部置いていくということ。つまり目の前に現われた彼が私の心の扉をもう一度開けてくれた。そして私はそこにサプライズを見つけたというのだ。サプライズとは、人生の崖っぷちで恋が見つかったことを指している。

I found love, love in the nick of time

I found love, love in the nick of time

I found love, love in the nick of time

最後にやっと、この曲のタイトルが出て

くる。

私は愛を見つけた、時間の欠片に。そう、'nick of time' は時間の欠片のことをいう。ニックとは小さい傷のことだ。例えばヒゲを剃っている時、カミソリで肌を切ったようなときに使う単語だ。物に傷つけた時も使う。自分に残された時間の小さい欠片にギリギリ間に合ったということだ。つまり崖っぷちの恋愛。もう恋もできなくなってしまうほど傷ついて年もとってしまったが、思いがけず恋に落ちたのだ。

ボニー・レイットの場合は、恋愛だけでなく、レコード・セールスにも当てはまる。なにしろ、10枚目のアルバムだ。レコード会社を移籍して、最初にリリースしたアルバムで、やっとメインストリームに乗れたのだ。おめでとう、ボニー・レイット！ もう20年ぐらい前のことだけど、今さらながら彼女の才能が表舞台で評価されてよかったと思う。89年の

△アルバム・オブ・ジ・イヤ  
▽のベスト女性ポップ  
・ヴォーカル・パフォーマンス賞、ベスト女性ロック・ヴォーカル・パフォーマンス



ジョージ・カックル / GEORGE COCKLE  
ラジオ・パーソナリティ。  
1956年、鎌倉生まれ。  
18歳で新宿2丁目のロック・バー<開拓地>で、音楽の世界にのめり込む。ハワイアンなどのCDをプロデュースする傍ら、インターFMでは音楽番組「レイジーサンデー」のパーソナリティをつとめ、音楽通ぶりを披露。さらにサーフ・イベントなどのMCでも活躍。  
http://whatsupmusic.inc.com

ンス賞を受賞したのだ。そしてセールスも『ビルボード』チャートの1位を記録した。このあとに出したアルバムも『ビルボード』2位までいき、グラミー賞も3部門受賞。次のアルバムも『ビルボード』2位、グラミー賞を2部門で受賞した。まさに勢いに乗った彼女はヒットを出し、スターダムへと昇っていったのだ。

彼女は大人になるほど、歌がうまくなっていった。彼女もファンと一緒に大人になっていった。俺はそんな彼女が漂わせる大人の色気が好きだ。ギターも歌も強くて奥深い。苦勞を乗り越えるだけのパワーの持ち主だ。今、62歳。これからも、社会に通用していくアーティストとしてまだまだ活躍していくだろう。しかし、歌のなかの女友達はとうとうなくなってしまったのだろう。自分だけ幸せを掴んでそれでTHE ENDになっているけど(笑)。